

ピリピ書2章5－11節 「へりくだるキリスト」

1A 兄弟間の心構え 5

2A ご自身を低められたキリスト 6－8

1B 自分を捨てる 6

2B 仕える 7

3B 従順になる 8

3A キリストを高められた神 9－11

本文

私たちの学びは、ピリピ人への手紙2章5節からです。かなり期間が空いたので、おさらいをしつつ、本文に入っていきたいと思います。ピリピ人への手紙の主題は、「喜び」です。喜びと言っても、主にある喜びであり、主につながっていること、この方を源として得られる、関係から流れてくる喜びです。ゆえに、パウロは苦しみの中にあっても喜んでいました。彼は、ローマにおいて皇帝の前で裁判を受けるのを待つ、軟禁状態の囚人でありました。そのように鎖につながれているにも関わらず、彼の霊は喜んでいました。彼の思いがキリストだけになっていたからです。「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。(1:21)」この方を第一とする時、この方がこの方であることを認めて、その大きさを受け入れていく時に、私たちは自分の周りの状況を正しく見ることができるし、その中に喜びを見出すことができます。

そして本題にパウロが入り、御国の市民の生活をしなさいという勧めを行ないます。それは、パウロが苦しみを受けているだけでなく、ピリピにある教会が苦しみを受けていたからです。ピリピはローマの植民都市であり、ローマ人であることを誇りとしていました。忠誠を誓っていて、自主的にローマの大義のために自分を捧げていました。それ以上に、ピリピにいるキリスト者は御国に属している市民として生きなさいと勧めています。ピリピの信者たちは、その信仰に対して反対を受けていました。けれども、御国に属する者として、一つになって奮闘し、反対者に脅かされることのないように戦いなさいと勧めたのです。私たちが、霊の戦いの中にいること、そしてその戦いのためには自分たちが一つのチームであることをわきまえます。

そこで、ピリピには一つの問題がありました。教会の中で、二人の働き人の間に確執がありました。相手側にしていることは間違っている、私たちの側についていけないといけない、と言ったような、自分たちを高め、引き寄せようとしていた問題が起こっていました。競争になっていたのです。けれども、一体となって戦っている時に、不一致は致命的であります。スポーツのチームで仲間の選手が争うことほど、失点を取ることはありません。戦争において、部隊の中の兵士が競い合いを行なったら、生死にかかわる問題となります。

1A 兄弟間の心構え 5

そこでパウロは、一つになることを勧めました。「2 私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。」と語っています。そこで必要なのは、「へりくだり」です。へりくだりとは、自分を卑しめたり、ましてや自己嫌悪に陥ることではなく、第一にキリストとその御国を求めていること、それゆえ第二に、他の仲間のことを顧みることです。他者の利益を求め、自分というものを無くすことです。私たちがへりくだることによって、初めて一つ思いになることができます。

そこでパウロは、今、彼らの教会、そして今日の私たちの教会においても死活的な一つになることにおいて、これだけ大切なへりくだりをさらにしっかりと教えたいと願いました。そこで、彼らが信仰で一致しているところの方、つまりキリストご自身に見ることのできるへりくだりを、しっかりと示すことにしました。

5 あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。

「そのような心構えでいなさい」というのは、3-4 節に書いてあることです。「3 何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。4 自分ごとだけではなく、他の人のことも顧みなさい。」という心構えです。その心構えが、「キリスト・イエスのうちにも見られる」ということです。これから私たちは、神であられるはずのキリストが人となって、十字架の死に至るまで忠実であったという福音の真理を読みます。私たちはこの真理に驚き、畏怖の念を抱くのですが、それだけでなく主は、私たちもキリストに結ばれた者として、その心と意思を持っていなさい、ということです。キリストにつながって、キリストの御霊によって、自分もこのへりくだりの中に居留するということです。

2A ご自身を低められたキリスト 6-8

1B 自分を捨てる 6

6 キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、

キリストが、「神の御姿であられた」とあります。これはもちろん、目に見える姿形のことを指しているわけではありません。そうではなく、「内の性質が外側に表現されている」ということです。キリストご自身を見れば、そこには神の本質の完全な現れがあるということです。「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによって、万物を保っておられます。(ヘブル 1:3)」とあります。さらに、コロサイ書ではキリストが神の御姿であることを、その創造の働きを示すことによって説明しています。「コロサイ 1:15-17 御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて

御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。」そして、ヨハネ 1 章 1-3 節も同じです。「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。」

ですから、イエス様が十字架につけられる前の夜に、「世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。(ヨハネ 17:5)」と祈られましたが、それは永遠の昔から存在する神、天地を創造された方としての栄光です。私たちは日曜礼拝で、イザヤ書 6 章に出てきた、高く上げらえた王座に着いておられる方は、イエス・キリストご自身の栄光であったことを学びました。二千年前に受肉する前から主は存在しておられました。それは、神の御姿としての栄光です。

ところが、「神のあり方を捨てることができないとは考えないで」とあります。ここは他の訳では、「神と等しい者であることに固執しようとは思わず、(新共同訳)」とあります。キリストは神と等しい方でありました。神のご性質の全てを持っておられる方でしたが、その姿に固執なさらずに、人の形を取られます。つまり、聖霊によって赤ん坊としてマリヤの胎から生まれます。ここで、キリストは神ではなくなったということではありません。主は、人の姿を取りながら、なおのことご自身であられました。神のご性質とその高い位を持っていながら、なおのことご自身を低め、人と同じ存在になられた、ということです。世界では王が、一般庶民にまぎれてみることをすることがあります。ヨルダン国王はタクシーの運転手になってみました。イギリスの王子はホームレスに紛争して、一晚、野宿してみました。彼らは別に王であることをやめたわけではありません。庶民と同じ姿になっただけです。それとキリストがなされたことは同じです。

しかし、王のあるべき姿を捨てて庶民になったように、キリストは神のあるべき姿を捨てて、人となりました。ここに、へりくだりがあります。もちろん、神が人となるへりくだりは、王が庶民になるへりくだりなど、比べ物にならない謙遜であります。そして、パウロが「キリスト・イエスの内にあるような心構えていなさい。」と言ったことを思い出してください。それは何か？「他者のことを顧みるために、自分の姿を捨てる。」ということです。神が人のことを思い、それで神のあり方をお捨てになったのと同じように、私たちが与えられている力や権利、その立場について、他者のことを顧みるために、それらを自分のために使うことを否む。」ということでもあります。

興味深い逸話がありました。ある就職カウンセラーが、数多くの働き手を適切な職場で働かせるのに成功した人がいるそうです。どうして、そう的確な配置ができるのですかと尋ねたところ、「その働く人がどのような人かを知りたいければ、責任を与えるのではなく、「特権」を与えるのです。大部分の人は十分に給料を出せば、責任は果たせます。けれども、特権を取り扱うのは本当にその人が指導者になれるかどうか、試されるのです。指導者は、他者を助け、組織を作り上げるの

に自分の特権を用います。指導者になれない人は、自分のところに人を引き寄せるのに特権を用います。」これは、まさにそうですね。キリストのように、権威と力と位において特権をお持ちの方はおられません。けれども、ご自分のためではなく他者のために用いられたのです。

2B 仕える 7

7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。

「ご自分を無にする」というのは、仏教のような「無の境地」とかそういうものではありません。父なる神に信頼し、この方の御心に従い、そして他者を愛していくなかで、ご自分のことを忘れてしまう、ということです。医療機関で働いている人が、大地震が起こって、自分自身も骨折しているのに、次々と運ばれてくる患者の対応に集中していたので、骨折していることを忘れて働いて、少し時間ができてようやく、その痛みに気づいた、なんていう話がありますね。そうしたことであります。

そして、他者のことを顧みるだけでなく、「仕える者の姿」を取られました。すなわち、それを実際に奉仕、仕えることによって示したということでもあります。ただ思いの中のことでなく、実際に手足を汚して動かして働く、ということです。ここの「仕える者」は、ドューロス、すなわち奴隷の中でも全く権威の持たない、全く売り渡されたところの奴隷です。ゆえに、「人間と同じようになられた」とパウロは、再度、キリストが人間と同じようになられたと強調しているのです。そこには、単なる思いだけは人に向かっていただけでも、人間性や人間味はなかったということでは決してない、ということをお教えています。具体的に動いていたのです。

「思い」ではそうであっても、手足を動かさなければ意味がありません。「キリスト者は既にキリストにあって一つにされているのだから、別行動を取ったところで構わないではないか。」という考えであれば、反論いたしましょう。「役所に行ったら戸籍上は確かに結婚しているけれども、夫婦、別行動を立っても、確かに結婚していますね。」いかがでしょうか？ピリピの人々は具体的に、パウロの福音の働きに対して、献金をしました。そして、責任関係を互いに持ちつつ、親しい交わりをして、それで忠誠を尽くして奉仕をしている中には、無私であるがゆえの真実な喜びがあります。

イエス様が、ご自身が動かずに仕えてもらうことはなくても、動いて仕えておられました。主が弟子たちに言われました、「マルコ 10:45 人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」そこでは、弟子たちが誰がイエス様の王座の右と左に着くことができるか、と議論している中で語られたことでした。この競争、私たちの内に誰でもある性質です。自分が他の人よりないがしろにされていると思って妬み、それで何か行動に移すことです。しかし、自分が後ろに回っていようが、一向に気にしない時、その人は主の喜びに満たされています。

そして、誰もが面子を気にしてしない、しないことで自己保身を守っているという過ちもあります。

最後の晩の過越の食事の席で、弟子たちの足を洗う人が誰もいませんでした。それは、誰かがしなければいけないことは分かっていたのですが、足を洗うのはしもべのすることなので、そこまでして自分を卑しめたくないと思ったのです。けれども、イエス様が弟子たちの足を洗われました。そしてイエス様は言われました。「ヨハネ 13:14-15 それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。」自ら、主の御霊に示されて手足を動かしている人々の姿は、麗しいです。その人の霊は、真実な主の喜びに満たされています。なぜなら、主ご自身の内にある心構え、思いを持っているからです。

3B 従順になる 8

8 キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。

6 節では、キリストは他者のことを顧みて、ご自身を無にされました。7 節では、顧みるだけでなく、仕える姿を取られました。ここ 8 節では、父なる神に従順になり、ご自身の命を犠牲にされた、ということです。

仕える、奉仕において、二つの種類があります。それは、「犠牲がなければ奉仕していいです。」という態度です。もう一つは、「犠牲が伴っても、主に仕えます。」というものです。そしてこの犠牲は、嫌々ながらのものではなく、愛が動機であり、自ら進んで行なうものです。自分ができる範囲で行っていきます、という態度と、必要ならば自分が犠牲になっても構わないというのは、大きな違いがあります。イエス様は、ご自分が良い牧者、そして他に雇われの羊飼いがいると言われました。雇われは、狼が来たら羊を置き去りにして逃げていきます。良い牧者は、羊のために命を捨てる、と言われました。雇われ、というのは、自分に何らかの利益が生じるなら奉仕します、という態度です。だから、自分に益にならないと分かると、自ずとその務めを捨てます。けれども、キリストの思いを持っている人は、犠牲を厭いません。また、それが犠牲であるとさえ顧みていないでしょう。

ある人がかつてこう言いました。「犠牲のともなわれない奉仕の務めは、何も成し遂げることはできない。」また、ある人は、「祝福(blessing)があるところには、心血(bleeding)もあるのだ。」と言いました。これがキリストに自分の意志を明け渡し、自らをキリストの意志に屈服させたキリスト者の姿です。

思い出すのが、ローズ・ウォーマーというユダヤ人女性の話です。彼女はユダヤ人でありましたが、新約聖書を読んでイエスをキリストとして信じ、受け入れました。それから同胞のユダヤ人に伝道する宣教師となりました。ところが、ナチス・ドイツがユダヤ人迫害を始めます。強制収容所にユダヤ人は行かなければいけませんでしたが、しかし、クリスチャンだということだけ申告すれば、収

容所は免れることができました。けれども、彼女は同胞の民と一つになるために、ユダヤ人であることを明かし、強制収容所に行くことを決めました。そして一年間、壮絶な苦痛を味わい、奇蹟的にホロコーストを生還しました。彼女には、確かにキリストの心構えがありました。それは、神の救いを願って、同胞のユダヤ人のことをいつも思っていたこと。そして、彼らに仕えていたこと。そして、避けようと思えばクリスチャンであることを使って、避けることができたけれども、彼らへの愛から一つになることを選んだこと。そこには命という犠牲も惜しまない心がありました。

そして、キリストの働きに戻りますと、「自分を卑しくする」つまり、低めた、へりくだった、ということですが、どこまでか？と言いますと、「死にまで従った」とあります。従った、という言葉は従順と言い換えることができます。イエスは人の姿を取られて、その限界の中から出ることはありませんでした。神に御子として、その弱さを知る必要もありませんでした。しかし、後に人々のために執り成す祭司となるために、その弱さを学ばれました。

そこには「従順」が必要でした。従順とは、父の言うことを子が聞くということを考えていただければいいですが、子はなぜこのことをしなければいけないのか、悟ることはできません。けれども、ただ父がそう言ったからという理由だけで、その権威に従うことが良いことだということは知っているから、従うということであります。イエス様は、なぜ死ななければいけないのか、できますならば、この杯を過ぎ去らせてください、と祈られました。なぜご自身が父なる神から引き離される苦しみ、神の怒りの杯を飲みほさないといけないのか、それが辛かったのです。けれども、「あなたの願うとおりにしてください。」と祈られました。しかも、同じ祈りを三度もされました。

私たちにも、「なぜ、このようなことになるのですか？」という叫びを出したくなるような時があります。しかし、キリストの思いを抱いているのなら、そのような叫びを出したい時に、それでも主がそうしなさいと言われるところに従う時、そこには深い悲しみがあるけれども、心は失望しない、むしろ痛みの中に御心を行なっているという喜びと満足があります。

そして、「実に十字架の死にまでも従われた」とあります。イエス様は、人の姿を取られただけでなく、仕える姿を取られ、仕える姿を取られただけでなく、死にまで従われ、しかもその死は栄誉ある死ではなく、ローマの反逆者や極悪人にのみ、見せしめのために執行された十字架刑にまで従われました。

しかし、私たちの救い主となられるための、神の栄光がそこにはありました。父なる神はイエス様に、「またもう一度栄光を現わそう。(ヨハネ 12:28)」と言われました。その激しい屈辱の中にさえ、他の処刑されて当然の罪を犯した犯罪人とは異なり、神の栄光が現われていました。人が卑しくされても、それがキリストを望みとする卑しめであれば、そこには御心を果たしているという満足があり、喜びがあり、そこに神の栄光が放たれます。

3A キリストを高められた神 9-11

このようにして、イエス様は自らを高めるのではなく、低められました。そこでキリストは高められます。

9 それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。

これは、まずイエスを神が復活させたところから始まります。その力と栄光は神のものであります。そして天に昇られ、神の右の座に着かれます。そして、地上に戻って来られ、王の王、主の主として君臨されます。そして、最後の審判を経て、新天新地において、神と小羊は永遠にほめたたえられます。これが高く上げられることです。

これは、イエス様ご自身がそうするのではなく、父なる神がこの方を高められることに注目してください。ここにキリストにある思い、その心構えがあります。私たちが自分を低くすると、そこに神の引き上げがおこります。自分ではなく神が引き上げてくださいます。低くしたそのへりくだりの中に、力をふるっている異邦人の王よりも力と権威を持つ、神の力が与えられます。私たちは自分を低くすることが務めで、神が私たちを高められるのがその働きです。思い出してください、自分で自分の居場所を確保しようとする、それは「虚栄」であります(2:3)。それをやっても、そこには中身がありません。虚しいのです。けれども、神が引き上げられる時は重みがあります。神の栄光が働くのです。「1ペテロ 5:5-6 同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。みな互いに謙遜を身に着けなさい。神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです。ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神が、ちょうど良い時に、あなたがたを高くしてくださるためです。」

「すべての名にまさる名をお与えになりました。」とあります。聖書時代の時に、名前は非常に重要な働きをしていました。名前には、その人の本質、人格、その人そのものを示していました。ですから、すべての名にまさる名というのは、イエスこそがすべてにまさる方、第一の方ということです。ペテロがサンヘドリンにおいて、このように宣言しました。「使徒 4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」

2:10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、11 すべての口が、「イエス・キリストは主である。」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。

話しましたように、終わりの日にはすべてのものが御子の下に一つに集められます。そして、天において、イエス・キリストが主であると告白します。天使や贖われた魂のことです。それだけでなく、地においてもイエス・キリストが主であると告白します。それだけではありません。「地の下にあ

るものすべて」です。「ひざをかがめ」とありますが、これはひれ伏す姿です。屈服する姿です。地の下というのは、陰府のこと、ハデスのことです。つまり、死後に神のさばきを受けるため待たされている者たち、救われずに失われた者たちも含まれます。墮落した天使らもいます。

彼らが、どうして「イエス・キリストが主」であると告白するのでしょうか？それは、強いられて行なっているのです。彼らが地上でいくらイエスが主であることを拒んでも、後の日には、イエスが主であることを否が応にも認めざるを得ないのです。その時の告白は、救われるための信仰告白ではなく、ゲヘナに投げ込まれる時の裁かれるための告白です。つまり、私たちはイエスに救いを求めるにしても、そうでなく拒むにしても、どちらにしても全てが告白するのです。地上にいる間に告白すればそれは救われるための告白であり、そうでなければこれは悲惨な結果になります。

そして最後、「父なる神がほめたたえられる」とあります。イエス・キリストが主であると告白すれば、それがそのまま、父なる神への賛美になります。なぜか？それは、イエス様が父なる神の前にへりくだり、この方の御心に従い、この方に服従していたからです。ゆえに、イエスが主と認められることは、父がこの方の中におられたからで、父の栄光となっているのです。イエス様は、父なる神と一つであられたがゆえに、ご自身がほめたたえられることは、御父があがめられることでありました。

これが、一致の奥義です。父とキリストは一つであられました。イエス・キリストはご自身を父の御心に従わせることによって、父の栄光を現わされました。そして私たちは、キリストに服従することによって、キリストと一体になることができます。この方が私たちの内に住み、この方が私たちの中で生きて働いてくださいます。それでキリストの名があがめられ、そして神の名があがめられるのです。そして、これが互いの一致の奥義でもあるのです。キリストにあるへりくだりの中に私たちも留まれば、私たちがキリストと一つになり、私たちではなくキリストの御名があがめられるのです。私たちはこの方の恵みにあずかり、大きな特権と栄誉を受け取るのですが、それで私たちの名が高められるのではなく、私たちがキリストと一つであるがゆえに、キリストの名が高められるのです。一致がいかに大切か分かるでしょう、他者のことはさておき自分で動いていればよい、そうしているところに、どんな良い働きに見えても、キリストではなく自分の栄光になる、つまり虚栄なのだということに気づく必要があります。